

冷泉家蔵本と書陵部蔵本と

— 『六条院宣旨集』と『躬恒集』との場合 —

The Transformed Text in a Hand-Written Copy (II)

今野 真 二
(人文学部人文学科 日本・東洋文化コース)

Shinzi KONNO

Abstract: Rocujimosenjinoshu and Mitsuneshu are the anthologies organized in the Heian period. In the Reizei's library, there are these Hand-written copies in the last Heian period. In the Shoryōbu's library, there are Hand-written copy in the Edo period, of the Reizei's library. In a comparison the former with the latter, from philological view, there are many things of reflections of the age's language. From these things, we know how the texts change in a process of transcription.

稿者は先に、高階家一門の詠を集めた鎌倉時代後半の私撰集『遺塵和歌集』を採り上げ、冷泉家時雨亭文庫に蔵されている鎌倉末期に写されたと覚しき一本が、靈元天皇(一六五四―一七二三)の御代に、さらに言えば貞享二―三(一六八五―一七三二)年頃(註1)にどのような書写されたか、ということがらを通して、「臨摸」と呼び慣わされる書写形態が実態としてどのようなものであるのかについて聊かの分析を試み、また鎌倉期写本を江戸期に再転写するというごとく、隔たった時期にそうしたことが行われた場合に、それが言語の面でどのような様相を呈するのか、についても併せて考えてみた。(註2)本稿では平安時代に成立した私家集である『六

条院宣旨集』並びに『躬恒集』(註3)を採り上げ、さらに分析を進めてみた。

一 『六条院宣旨集』について

『六条院宣旨集』は平安時代後期の女流歌人である六条院宣旨の家集である。冷泉家蔵本には藤原定家の手になる外題に「六条院宣旨集」、藤原俊成の手になる内題には「六条院のせんしの集」とある。この俊成真筆の内題(あるいは本来の外題)を有する私家集は、例えば前田家旧蔵『中務集』(現出光美術館蔵)、前田家蔵『元輔集』他少なくないが、こうした一連の私家集は(俊成監督の下に書写された)『冷泉家時雨亭叢書 平安私家集 二』田中登解題二八頁)もの、と考えられている。ところで冷泉家蔵本の筆者を具体的に知る手がかりはテキストそのものにはみえない。書写年代は藤原俊成(一一一四―一二〇四)が関与しているところから、平安末期(十二世紀後半頃)と考えられている。したがってこの冷泉家蔵本の書写年時も相当に古く、冷泉家蔵本そのものが格好の国語史料であることは言うまでもないが、そのことがらのみを正面から採り上げることは

控える。ここで主に考えてみたいのは、当該テキストの成立(十二世紀後半)からおよそ五百年を経て書写された書陵部蔵本に、主に言語的事象として何が看取されるかということがらである。

書陵部蔵本についてはすでに(両者(引用者補:冷泉家蔵本と書陵部蔵本)の本文を子細に比較検討してみると、漢字と仮名の相違や、仮名の字母の違いなどは認められるもの、一面の行数、一行の字詰めに至るまで、両者の本文はぴたりと一致することが知られるのである。即ち、時雨亭文庫蔵本を親本にして、それを忠実に書写したのが書陵部蔵本だということになろう。)(前掲解題三一頁)と評価されていることをまず挙げておく。冷泉家蔵本からの書陵部蔵本書写の形態には、例えば(片仮名本から平仮名に代える)(仮名を漢字に充てて読みやすくする)など幾つかのあたりがあることが藤本孝一氏(註一参照)によって指摘されているが、書写形態の多様さは、結局のところ書写者が複数であることをごく自然に意味するであろうし、それに伴い書き手の技量もまた区々であると考えべきであろう。書陵部蔵本『六条院宣旨集』の書写者はまずは冷泉家蔵本の筆致をよく写している、というべきであろうが、先に扱った『遺塵和歌集』の場合と比すれば、その書写者としての技量はやや劣るといえよう。そして厳密な複製本製作という意味における「臨摸」を志していない、と見受けられることをまず初めに確認し、以下具体的な個々のことがらについて述べていくことにする。

一の一 書陵部蔵本の書写態度について

書陵部蔵本では冷泉家蔵本の仮名字体を四四五箇所にわたって変更しており、この一事を以てしても書陵部蔵本『六条院宣旨集』の書写者に臨摸意識がなかったことが窺えよう。またその変更箇所分布は均一ではない。

すなわち当該テキストは本文墨付部分が二二丁、総計二四丁であるが、一八〇(二四ウの末尾七丁に二四四箇所(全体の五四・八%)の変更箇所が集中しており、書写に關しての集中がこの辺りでかなり緩んだことが顕著に現れている。書陵部蔵本の書写者が臨摸の意志をさほどもっていないことは前述した通りであるが、それでもできる限りは原本に従って写している。それが一八丁以降はいわば写すのが精一杯になった、と見受けられる。また仮に全体を八丁ずつ前中後の三つに分割してみると、この仮名字体の変更箇所は、前一〇二、中八四、後二五九で、底本に次第に慣れ、集中力も続き書写の調子の上がった状態を経て、集中力の緩んだ状態への移行がこの分布からはつきりと窺える。藤原定家筆本『土左日記』の奥書によれば、藤原定家は文暦二年に(老病中/雖眼如盲不慮之外紀氏自筆/本蓮華王院寶蔵本)を手にし、(不堪感興自書写之昨今二ヶ日/終功)というこれは定家七十四歳のことであり、その老齢と、加えて自らが記すように必ずしも健康状態もすぐれない中で、そして周知のごとき様々な吟味、詮索を加えながら二日間貫之自筆本を写し終えたことを通常の書写とどのように測り比べるか、はなはだ難しいが、残されている定家筆本『土左日記』の墨付本文が四十六丁であることからきわめて機械的に考えれば、一日に約二十三丁を写したことになる。(補注)これをひとまずの目安にすれば、『六条院宣旨集』の墨付本文はこれとほぼ等しく、おそらくは書陵部蔵本の書写者もこれを二日にわたって写すことはしなかつたと予想され、為に後半部に書写の粗さが現れたのであろう。

一の二 仮名字遣(註4)について

稿者の興味の一つは(仮名字母の違い)がどのようなかたちをとって現れるかを観察するところにある。まず、これまで諸先学の調査によっても、また稿者自身の調査によっても、もつともひろく、かつ組織だつてみられ

る仮名文字遣として、仮名「は」についてみることにする。冷泉家蔵本には仮名「は」が一九三みられるが、その内訳は〈者〉が二三〇（六七・四％）、〈は〉が三四（一七・六％）、〈ハ〉が二八（一四・五％）、〈盤〉が一（〇・五％）である。もつとも冷泉家蔵本にしても転写本であり、この冷泉家蔵本の状況が厳密に何人の仮名文字遣であるかを特定することは適わないのであるが、幾つかの徑庭を経て冷泉家蔵本に現れるに至った、と多少く漠然と捉えておくことにする。この冷泉家蔵本の状況は、中世期のきわめて成熟した仮名文字遣と比較すれば、仮名文字遣が発生しつつある状況とみえる。すなわちこの仮名「は」に関しての仮名文字遣では、〈ハ〉が音韻ワ及び音韻バとふかく結びつくところにその特徴があるが、その結果として必然的に助詞「は」「ば」に〈ハ〉が充てられるところから、この〈ハ〉の使用数そのものが多くなるのが一般である。しかるに冷泉家蔵本においては〈者〉使用が群を抜いており、この〈者〉が仮名「は」を代表する字体であることが明らかである。しかしその一方で少数使用された〈ハ〉に目を向ければ、そこにはある種の傾向が窺われる。仮名文字遣が「発生しつつある」と前述した所以である。すなわち、〈ハ〉二八例は、やはり音韻バに一二例、音韻ワに一五例が使用されており、音韻ハには結局一例しか使用されていない。この限りにおいては、これはこれで立派な仮名文字遣と評価すべきであるが、やはり音韻バ及び音韻ワにおいて〈ハ〉が充てられていない場合が相当数あることを、ここではいわずば未だ熟さないとみているのである。

今一つ別の意味で注目しておきたいのは〈ハ〉二八例中一二例が行末で使用されていることである。例えば「おしみかねおりてかへらむ／山さくらさらねとのこす／あらしならね〈ハ〉」（九番歌 三ウ六／八 歌番号は明治書院刊『私家集大成 第二巻中古Ⅱ』において書陵部蔵本を底本として施されたものに従う）や「ついのわかすかたとおもへ〈ハ〉／かやり火のけふりをみて／ものそかなしき」（三〇番歌 八ウ三／五）のごとき

ものである。行末に〈ハ〉が位置する時、そのすべてがそうではないが、行末に物理的な空白をあまりもたない場合が少なくない。形態的な落ち着きということからすれば行末に配する押さえの字体としては〈は〉が相応しいことは言うまでもない。事実〈は〉三四例中、六例（九ウ七・一八オ一四・一八ウ六・一八ウ九・一九オ四・二三オ九）が行末で使用されている。ただしこれらは行末に十分な空白をもっている場合ばかりである。〈は〉が〈ハ〉に比して十分な空白を必要とすることは自明であり、空白の少ない行末に書かれる、ということは実は字体〈ハ〉の使用のそもその契機ではなかつたのか、と考えるがこれについてはさらに種々の然るべき資料の観察を続けていきたい。

ここまで冷泉家蔵本においては、組織的なかたちでの、仮名「は」に関する仮名文字遣はみられないものの、すでに字体〈ハ〉と音韻ワ及び音韻バとの結びつきはみられることを確認してきたが、次にこうした冷泉家蔵本の状況が書陵部蔵本ではどのように受け止められているかについてみることにする。書陵部蔵本において総計四四五箇所仮名字体の変更が行われていることについては先にふれたが、仮名「は」についても種々の置き換えがなされ、冷泉家蔵本の「冬かれの、へのあさちかうへに／おくしもやした〈者〉にすかる／たるひなるらむ」（五七番歌 一四オ九／一一 傍線部見消）の「したは」が書陵部蔵本では「した葉」と写されており、これを漢字表記と考えると、書陵部蔵本には仮名「は」が一九二存することになる。内訳は〈者〉が一九九（七七・六％）、〈は〉が一七（八・九％）、〈ハ〉が一五（七・八％）、〈盤〉が一（五・七％）で、冷泉家蔵本と比較すると〈者〉〈盤〉の使用が増えている。〈ハ〉使用が減少していること自体がある意味では注目に値する。すなわち「ときなはのとくとそいそ／身のうさもみなつきはつる／みそきとおもへ〈ハ〉」（三四番歌 九オ一〇）や「みつとりのあたねのこのの／なみまくらうきよの中に／あるはあるか〈ハ〉」（六三番歌 一五オ九）のごとく句末でかつ行末に位置し、音

韻バ、音韻ワに充てられている(ハ)が(者)をもつて写されており、この仮名「は」をめぐる仮名文字遣に限つても、意識無意識は今問わぬことにして、書陵部蔵本書写者の習慣にはそれがつよいかたちとしてはなかつた、と言えようか。ここから推せば靈元天皇の御代は、仮名文字遣が一般的、つまり仮名文字遣が存在することが当たり前ではなかつた、との予想がたてられよう。

しかし一方で次のような例もみられる。

- a もろひとのけしき(裳)／ことになりけりさ／こそは春のたちかはるとも(一)番歌 一オ三
- b 春をあさみなをし(羅)／ゆきのふるすにはまた(宇)ちとけぬうくひすのこゑ(四)番歌 二ウ五(七)
- c しつのかたなれ(濃)／こまはるくれはのへに／つきけとなりけるかな(二)番歌 四オ四
- d さくらちるはるをうし／とやとしをへてかすみを(和)けてかへるかりかね(二)番歌 四オ一〇
- e (満)ちかきもくもゐに／きくもほと、きすあかぬ／心はかはらさりけり(二三)番歌六オ九
- f かたそきもあらたむはか(梨)／としふりて神さひにけり／すみよしのまつ(八一)番歌 一八オ一

これらはいずれも行頭行末に冷泉家蔵本にはみられない、比較的字画の複雑な仮名字体を配したものであり、こうしたことが書陵部蔵本において徹底してみられるわけではもちろんないが、いわば行に関わる緩やかな仮名字遣とでもいえよう。ただし、前述の(ハ)のごとく音韻との結びつきをみせる場合や表語との関わりを感じさせる場合などを、言語伝達とふかく関わる、機能性のある仮名文字遣と考えれば、こうしたある意味では機

能性とはやや遠い仮名文字遣はその速さ故に格別の積み重ねなく、また時代を限らず起り得る文字遣と考えることもできるが、これはこれで書陵部蔵本の書写者の一つの「技量」と評価し得る。また冷泉家蔵本では仮名「き」一四二例に関して(支)が一〇二例(七一・八%)、(き)が四〇例(二八・二%)使用されている。例えば青谿書屋本『土左日記』を藤原為家筆本にほぼ準ずるものと考え、さらには貫之自筆本にかなりな程度近いものと扱った場合に、そこに窺われる(支)二八四例、(き)六例、(幾)一例、(木)二例(註5)という仮名字体の使用を紀貫之の時代の在り方とまづは認め、彼此考え併せれば、(支)汎用が古いかたちといえよう。したがって冷泉家蔵本の(支)が書陵部蔵本において(き)に置き換えられた場合、これが実際に二三例みられるが、これはむしろ当然のことといえる。しかし逆に冷泉家蔵本の(き)を書陵部蔵本書写時には稀少字体であったと覚しい(支)で写した例が六例(三オ八・六オ八・九・九・九オ一〇・二三オ六)みられ、かつそれが前半に比較的集中していることは、書陵部蔵本書写者の、底本へのある意味での逸早い同化を示しており、興味深いことである。同じ意味合いにおいて、冷泉家蔵本三丁裏に存する九番歌を書陵部蔵本が「おし(美)かねおりてかへらむ／山さ(九)らさらねとのこす／あらしならねは」と写したこと、特に冷泉家蔵本にも見えない、そして当然江戸期では稀少字体と覚しき(九)を仮名「く」に配したことも注目しておきたい。

一 の三 仮名使用などについて

冷泉家蔵本において助辞「けむ」「なむ」「む」「らむ」の撥音部分には、(ん)が一八、(む)が六、配されており(ん)表記への傾きが明らかである。この傾向が時代が下るに従い顕著になっていくことは言うまでもない。

しかるに書陵部蔵本においては冷泉家蔵本が「ん」を以て書き表していた「らん」(六才七)「ん」(二二ウ一二)までを「む」表記しているのである。(註6)さらに冷泉家蔵本は次の二箇所において助詞「を」を「お」で表記する。このことがらをどのように解すべきかについては慎重に扱うべきであるが、こうした表記をみせる文献は平安末期、鎌倉期にかけてみれば稀有ということでもない。

g さくらちるはるをうし／とやとしおへてかすみを／わけてかへるか
りかね(一二番歌 四才九)

h すみふるすみ山おいつる／うくひすは日もくれたけに／たひねして
けり(八二番歌一八才五)

これらが共に書陵部蔵本で「越」すなわち「を」に置き換えられているのは、ひとまずは当然というべきことか。

また『遺塵和歌集』についての前稿でもふれたが、三例みられる仮名二字以上相当の踊字の起筆位置は、冷泉家蔵本においては明らかに下字の末画の上方にあるが、書陵部蔵本では「冬のよなく」(一五才三)以外の二例、すなわち「たえく」(二五ウ一二)、「はしくら」(一九才六)は下字の末画よりかなり下方に起筆することも時代相といえよう。

次の事例は興味深い。前掲解題には「一行の字詰めに至るまで、両者の本文はびたりと一致する」とあるが、実は一致しない箇所が二箇所みえる。つまり冷泉家蔵本には

i さみやみ、ちもしられ
すたちはなのはなさく

j さとにしるへせよ風(二八番歌 八才六、八)
あきくれははきはなすり

にほひつ、あきはうれ
しきたひころもかな(三七番歌 九ウ一〇、一〇才二 傍線部見消、
傍書わけ)

とある箇所を書陵部蔵本は

i さみやみ、ちもしられす

たちなのはなさく
さとにしるへせよ風

j あきくれははきはなすり
にほひつ、あきはうれしき
たひころもかな

と写しており、冷泉家蔵本にあつて「しられす」「うれしき」と、一つの所謂「文節」または一語が二つの行に跨るかたちで写されていたものが書陵部蔵本ではまとまりよく一行に写されている。このことから自体は奇とするようなものではなく、むしろ感覚的には納得し得ることがあであるが、その背景にある「行」の意識とでも呼ぶべきものには注目しておく。まず冷泉家蔵本が、一一五首の和歌をいかに記しているかについて整理しておく。一八・七七・一一三番歌を(ほぼ)二行で記している他はすべて和歌を三行書きしている。二行書きされた三首の中、一八番歌は五丁表末尾に位置しており、聊か窮屈に二行書きしたと覚しいが、これはやはりこの面すなわち五丁表に和歌を収めようとの意識によるものと考えられる。といって、冷泉家蔵本においてすべてこのような「処置」が施されているのではもちろんなく、こうした改面に際して三行に書く和歌の、その一行を次面に送ったものとして、二九・四三・六一・六八・八四・一〇三番歌と六例がみえ、さらに二行を送ったものとして、一〇・三一・三七

・四〇・四六・四九・九九・一〇六番歌と八例がみえている。しかしやはりこうした改面、改丁に際して書写上の事故が生じやすいことは充分に予想され、実際四六番歌では冷泉家蔵本は「きりはれぬよのおふねの」おふねのみなれさをさし／てゆくへそわすられぬへき」と衍字を生み、書陵部蔵本書写者はこれに当然気づき、衍字部分に「如本」と傍書を加えている。冷泉家蔵本五二番歌(二二才最末尾)、七一(七才最末尾)では、狭い空白に無理に三行目を書き込み、一行を次面に送ることを避けていることが明らかである。冷泉家蔵本『六条院宣旨集』は綴葉装であるとのことで、丁の表から裏への移行は裏から表への移行に比して隔たりが大きい。前述のごとく、改面、改丁また改行の際に事故が起こりやすいことは事実であり、それは書物の書写が繰り返される中で当然経験的に知られていたであろう。しかし、そうした事故を避けるために面や行において纏まりを求めたのではなく、いわば書記の単位において纏まりが自然に求められるように次第になっていった故と考える。こうしたことがらについては夙に池田亀鑑が高著『古典の批判的処置に関する研究』で指摘し、稿者もその驥尾に付き、青谿書屋本『土左日記』を素材として聊かの分析を試みたことがある。(拙稿 一九九五a) 冷泉家蔵本には「面」を単位として書記の纏まりをつけようとする意識がみられるとまずはいえよう。

次に二行乃至三行書きされた和歌を行を単位としてみた場合に、改行が、所謂「文節」また一語の切れ目と一致しない場合がどの程度存するのかについてみることにする。一一五首中、二行書きされたものが三首のみで、他は三行書きされているのであるから、和歌において改行が二二七回行われていることになる。また当時の語構成意識などを問題にすべきところでもないで、判断はごく当たり前に行う。すると改行と所謂「文節」の切れ目とが不一致のものが二〇、単語の切れ目とが不一致のものが一二を数えた。不一致といっても、書記された文字を言語に対応させて理解していく、その対応の過程で改行が言語の「分節」つまりは認識に著しく障る場

合とそうでない場合とがあるから、実際に問題とすべきはこの中のさらに少数となろうが、例えば

k もろ人も、ろ心にやもろ

はくさ神にたのみをけ

ふはかくらん (二二番歌 六オ五―七)

l さもこそはあきはくれた

のもしならめこそゑのもし

ちしはしと、まれ (五四番歌 一三ウ六―八)

などは聊か気になるところである。しかし逆に先ほど数え上げた三二を改行二二七回と比べたとき、やはり八六%程度は所謂「文節」や単語の切れ目と改行が一致していることになり、その点からすれば、冷泉家蔵本は随分と整ったすがたをみせているといえよう。つまり冷泉家蔵本には書記の単位としての「行」意識もかなり窺えるということになる。このような意識は時代と共に次第に徹底したものになっていくことが、流れとしては予想できるが、書陵部蔵本のij二首での状況はそれを裏付けるものといつてよいであろう。その意味で注目しておきたいのである。

一の四 「本文」の異同

次に所謂「本文」の異同に関わる箇所を掲げておく。m「としをへて心はのきの／あやめくさた、かりそめの／たよりとそみる」(二四番歌 七ウ二)を書陵部蔵本は「としへをへて心はのきの／あやめくさた、かりそめの／たよりとそみる」とし、またn「たひ、とのつゆのおほの／あさたてはみのしろ／もかひなかりけり」(四五番歌 一一オ七)を書陵部蔵本は「たひと、のつゆのおほの／あさたてはみのしろ／もかひ

なかりけり」とする。また〇「はれかたきまとひのくもに／くらされてむつのみちにや／ゆきかへる／へき」(一一三番歌 二四ウ二)の「みち」を書陵部蔵本は「みや」、一一四番歌の歌題「めうをむ(妙音)」を「めうせむ」とする。特に後二例は「むつのみち(六道)」「妙音」なる語であることが明らかであり、ここが最終丁であることを思えば、集中力の減退に起因するものといえよう。また前二者も単純な誤写に類するものにも見えるが、とすれば書写後に反省が加えられていないか。次の一例はやや微妙である。一〇一番歌の詞書に冷泉家蔵本では「ゆかりありてつねに／まいらみまいらすへかりしかと／さもなかりしかは仁わしの／一品の宮へまいらせし」(二二ウ八)を、書陵部蔵本は「みまいらすへかりしを」とする。

冷泉家蔵本の「しかと」は微妙な字形ではあるが、「を」の字形と一々比べていけば筆致が明らかに異なっている。従って此箇所については書陵部蔵本書写者が字形を誤認したとみる。同様の例を今一つ。七七番歌は冷泉家蔵本に「おもふことかなはてのみそ／ふるさとのやふる、ものは心なりけり」(二七オ九)とみえる。傍線部分字形は微妙であるが、歌意からも、また冷泉家蔵本の他の〈者〉字形と比較すれば「かなはて」は確實であるが、この箇所を書陵部蔵本は「かなえて」とする。(翻刻一・二共同し判断を示す)こちらの字形も微妙であるが、やはり「え」と認むべきものであり、やはり書陵部蔵本における誤認の例と覚しい。歌意を考え併せれば「かなえて」はあり得ないところであるが、やはりそうした充分な反省を加える暇なく書写されたとみるべき一証左といえよう。以上ここまで「六条院宣旨集」に関して冷泉家蔵本と書陵部蔵本とを彼此比較し、そこから窺われる書写上の問題について主に言語の面から聊か分析を試みた。

二 『躬恒集』について

二の一 書陵部蔵本の書写態度について

まず冷泉家蔵本についてみておく。一丁表から六丁表までは部分的に散らし書きを交えるが、まずは通常の書写形態をとる。一面行数は七〜十行。六丁裏から十五丁裏までは一面に五〜九首の和歌をきわめて変化に富む散らし書きをする。例えば「いま、てに／ちらすは／あれとさくらはな、／きものとのみ／おもほゆるかな」(一一五番歌 一二ウ) (註7)のごとく一首を五つに区切って書写することがもつとも多い。区切りはいわば改行のかたちをとるのであるから、当然のことながら、一面中に短く切られた句が密集することになり、判読も通常の書写形態と比べればいささかの困難を伴う。そして十六丁表から十九丁裏まで短歌は一面に九〜十一首がほぼすべて一行書きされている。二十丁表には識語が散らし書き風に記されているが、こうした書写形態が冷泉家蔵本の書写原本をそのまま引き継いでいるのであるのかについてはさらに慎重に考える必要がある。冷泉家蔵本の書写年時は(院政期おそらく十一世紀末から十二世紀初頭あたりのもの) (『冷泉家時雨亭叢書 平安私家集』所収「躬恒集」田中登解題四一頁)とされる。この冷泉家蔵本には(右の下隅にかなりの破損があつて、これが毎葉に及んでおり、それがために本文に一定間隔で欠脱箇所が生じている) (同解題同頁)のであるが、その欠脱が書陵部蔵本にもほぼそのままのかたちで引き継がれており、このことがらが冷泉家蔵本と書陵部蔵本との直接的な関係を推定される「証」となっている。

ここで書陵部蔵本書写者の「技量」についてみておく。冷泉家蔵本を一瞥すれば明らかであるが、前述したごとく必ずしも読みやすいものではない。しかし書陵部蔵本はまずよく理解し、読んでいるといえる。ただし書陵部蔵本に誤写が存在しないわけではない。以下は書陵部蔵本の誤写、

誤認の例である。これら以外に若干の脱字がある。

めに見えてかせはふくと(＊ん)あをやきの／なひくかたにそはな
はちりける(五五番歌 六オ) ↓「ふくらむ」

春の、に／ころ(＊ん)かたしき／たかために／ならはぬかせに／
わかなつむらむ(八六番歌 九オ) ↓「くせに」

しろたへの／いもかころも／はむめの／はないろ／を(＊ん)かを
(＊ん)／わきそかねつる(二三六番歌 一四オ) ↓「ころもに」

春の日を／いまいくかと(＊ん)／お(＊ん)はねは／しつ心／し
て花をや／は見る(一五七番歌 一五オ) ↓「いくかとか」

また冷泉家蔵本は通常とは聊か異なる漢字使用をみせる。すなわち、

いつれとも春のひかりはわかなくに又／みよしの、山はゆきふる
(四番歌 一オ)

みな人の花のころ(＊ん)をきる中に人り／そおいにしほみはてぬ
る(六番歌 一ウ)

きみかため心もしるくはつし物おきての／こせるきくそありける
(四〇番歌 四オ)

さかさらむものとはなしにさくら花／お(＊ん)かけにのみ又き見
えつ、(五〇番歌 五ウ)

と、むへき／ものならなくに／はかなくも／ちるはな事に／たくふ
心か(五九番歌 六ウ)

おもひつ、／又いひそめぬ／我こひを／おなし心に／人はしらなむ
(六五番歌 七オ)

我れては／のちそこひしき／にこりえのそこと(＊ん)／しらぬあ
りか／とふみは(六七番歌 七ウ)

人のこも／かるときくまで／をみなへし／もと事になく／す、むし
のこゑ(九二番歌 九ウ)

ゆくさきは／又とほけれど／夏山のこのし／たかけはたち／うかり
けり(九五番歌 一〇オ)

あつさゆみ／春たちしよりとし月のいるか事くも／お(＊ん)ほゆ
るかな(一一オ)

花事に／をしむには／あらすわきもこか／やとのさくらそえ／こそ
わすれね(一四三番歌 一四ウ)

さとはみな／ちりはてにしを／あしひきの／山のさくらは又／さか
りな(り)(二五〇番歌 一五オ)

ゆきと見て／はなどやし／らぬうくひすは／ふく春風の又／さむき
な(り)(二五一番歌 一五オ)

我事や／人も見るらん／さくらはな／あくともし／らぬいろに／あ
るかな(一五五番歌 一五オ)

ほと、きすこゑもかはらてとし事にあかぬ心やかくめつらしき(一
九六番歌 一七オ)

むつ事も又つきなくにあけにけりいつらはあきのなかしてふよも
(二〇一番歌 一七オ)

秋のよのあかぬ我れやたなはたのたてぬきにのみ思ふへらなる(二
〇四番歌 一七ウ)

かりてくるやまつのとりをあき、りのたつたひ事にそらにこそ見れ
(二一八オ)

のごとき例である。これら以外に後掲 a c の例がある。ただし例えば「ご
とし」に対して漢字「事」を配することは、大福光寺本『方丈記』にもみ
えており、これらの表記はたしかに目を引くが、共時的、通時的にひろく
文献をみわたせばむしろさほど奇とするべきではないと考えるべきか。こ

うした表記にも書陵部蔵本書写者はよく対応して読み解き、それをほとんどの場合仮名表記にする。ところで藤原定家が古典書写に際して、「未だ」の場合は仮名で、「又」の場合は漢字で、あるいは「こと」という仮名連続の中「事」のみを漢字で書記するという書き分けの傾向があることが小笠原一（一九七三）によって指摘されている。定家の意図は明らかであり、そうした書き分けから見れば冷泉家蔵本のごときはずいぶんと混然としたものと映るが、しかしこうしたところに書き分けに向かうそもその芽があったともいえるのではなからうか。ここにも「事」「又」が現れているのは偶々とは思にくい。冷泉家蔵本では、音列「ごと」「ごと（毎）」「如」「むつ」言」が期待される一三例中九例に漢字「事」を充て、音列「まだ」が期待される六例をすべて漢字「又」で表記する。こうした表記方針とでも言えそうなものもとより藤原定家ほど徹底したものであるもろんなく、前者では仮名表記された例が四例、また「こと（事）」に対して「事」が充てられた例も三例みられるのであるが、仮名が清濁を書き分けないことに対しての「手当」めいたことがなされていることもまた事実である。例外が存在する以上、この冷泉家蔵本の段階では、こうした表記がどの程度意識的に行われていたか、それはそれで問題ではあるが、こうした表記法を自覚的かつ意識的に行うに至ったのが藤原定家であったとまずは考えるべきであろう。

書陵部蔵本の書写年時を直接的に知る手がかりは書陵部蔵本自体にはみえないが、やはり靈元天皇の下での一連の書写と考えるべきであろう。ところで書陵部蔵本は、前述のごとき冷泉家蔵本の複雑な形態を伝えず、識語を散らし書き風に冷泉家蔵本に従って写した他は、原則として和歌二行書きのかたちをとる。冷泉家蔵本書写者に関して特別な人物が比定されておらず、形態までを模す必要がその書写に際して認められなかったのであるうか、複製本製作という意志はひとめ難い。仮名字母の変更は言うに及ばず、漢字表記と仮名表記との双方向での変更ももちろんみえる。ただし、

これはこれで書写の一つの在り方であろうし、こうした書写はもちろん少なくない。この場合、書写者が写し留め、後世に伝えたかったのは、書写原本の何であるのかやはり言語学的な観点からは興味深い。表記の伝承にはさして意を用いていない、となればそれは「本文」ということになろうが、例えば靈元天皇の御代に「本文」に相当するそうした概念はあったのか、そしてそれはどのように意識されていたのか、何らかの方法で明らかにしておく必要があるように思われる。そもそも現在の「本文」なる概念についても考える必要があるのかもしれない。以下「六条院宣旨集」とは対照的ともいえる書写態度を窺わせる書陵部蔵本『躬恒集』について個々のことがらについて分析を試みることにする。

二の二 書写の単位（丁・行）に関して

冷泉家蔵本の「すくしこしとしをいくらかそふれ／はゆひいとなくもおいにけるかな」（十一番歌 二〇五〜六）が、書陵部蔵本ではちようど改丁にかかっているが、ここでは「すくしこしとしをいくらかそふれは」ゆひいとなくもおひにけるかな」と写されている。（『は改丁箇所』冷泉家蔵本の「すくし」「おい」を書陵部蔵本が各々「すくし」「おひ」とすることはここでは措くが、書陵部蔵本は冷泉家蔵本通り改行（つまり改丁）せずに、「かそふれは」と纏まりのよいかたちまで写して丁を改めている。時代としてはむしろ当然と言えようが、やはり書陵部蔵本書写者には丁の意識がはつきりと窺える。

冷泉家蔵本が散らし書きをとる場合、五つに区切られていることが多いことは前述した。この五つが和歌の各句に一致するとは必ずしも限らず、a「ゆくさきは／又とほけれど／夏山のこのし／たかけはたち／うかりけり」（九五番歌 一〇オ）のごとく、単語や所謂「文節」などの文法的単位とは添わないかたちで散らされる場合も少なくない。これを書陵部蔵本

が「ゆくさきはまたとをけれと夏やまの／このしたかけはたちうかりけり」と写すことはむしろ当然といえようが、このことがらは書陵部蔵本書写者の側に和歌の上句下句を書写の単位としての行に一致させるといふ意識が存することを示していることになる。同様の例として一〇六番歌(一一ウ)一〇七番歌(一二オ)一一五番歌(一二ウ)一二四番歌(一二オ)一二六番歌(一二ウ)一二七番歌(同)一三三番歌(同)一三四番歌(一四オ)一三六番歌(同)一三七番歌(同)一四〇番歌(同)一四一番歌(一四ウ)一四五番歌(同)一六五番歌(一五ウ)が挙げられよう。こうしたことがらは和歌の書記形式の推移を背景にさらに慎重に考えていく必要がある。

二の三 重点について

冷泉家蔵本では「いま、てにいてた、ぬみはも、(しき)／の宮のさくらを見てや、みな(む)」(八番歌 一ウ／)内は破損箇所を他本から推定したもの。b「ふるさとを／おもひやりつ、くるかりの／たひの心は／そらにさるらし」(四二番歌 四ウ)などから明らかなように自立語語頭、自立語語中、自立語語尾、付属語語頭、付属語語尾、いずれの位置においても自由に重点を使用する。拙稿(一九九六b)では使用位置からみた重点使用の推移を分節機能という観点から捉えてみたが、その使用位置に関して自由な、かかる重点使用は時代的には古いものと考えられる。自立語付属語を問わず、語中語尾位置での重点使用は時代の推移にあまり関わらない、ともいえるが語頭位置でのそれは時代が新しくなるにつれて減少していると感じる。冷泉家蔵本と書陵部蔵本との重点使用を数値の上から見れば、冷泉家蔵本にみえない重点を書陵部蔵本では二五使用し、逆に冷泉家蔵本に存在していた重点の二四を書陵部蔵本は別のかたちに置き換えている。今、書陵部蔵本を中心に考えて、前者を増加、後者を減少と呼ぶことにすれば、重点増加二五の中、冷泉家蔵本の「心」を書陵部蔵本が「こ、

ろ」とした例が二一、「心地」を「こ、ち」とした例が一例みえるが、他三例は各々興味深い。冷泉家蔵本「かをとめて／たれをらさらん／むめのはな／かにこそに／たるものなかり／けれ」(八五番歌 九オ)を書陵部蔵本は「かをとめてたれをらさらむ、めのはな／かにこそにたるものなかりけれ」と写す。前述したごとく時代的にみれば(自立語)語頭位置での重点使用はかなり稀になっているのが一般であろうが、一方で書陵部蔵本書写者は自らがそうした位置でいわば自発的に使用することもあったということである。そうした位置で重点が使用された文献、つまり時代的に遡る文献に親しく触れてきた経験に基づく重点使用であることを予想させる。また冷泉家蔵本の「をみなへし人もとゆへにあきの、のちくさなからもはなをもふかな」(二〇七番歌 一七ウ)「ゆきやらぬ心やなにそあきの、のみちには人もあらしとそおもふ」(二一八番歌 一八オ九)の「あきの、の、(秋の野の)」を書陵部蔵本は二箇所共「あきの野、」とする。「あきの、の、」は通常考え難いので、冷泉家蔵本のかたちは重点使用の一般的なかたちといえようが、語の切れ目が分かり難いことも確かである。それに対して漢字表記を交え、連続する「の」の最末尾に重点を使用した書陵部蔵本に、漢字を相應に使用しながら分節の上からはわかりやすいかたちをとる中世近世期の表記の在り方が窺われるといえよう。「春の、に」(八六番歌 九オ)(一〇八番歌 一二オ)は当然、「春の野に」と写され、「かす／かの、へは」(一一ウ)は「かすかの野へは」と写されるのである。

重点減少二四例中、一例は冷泉家蔵本「わひ、との」(二番歌 一オ)を「わひしとの」と誤認したことに起因するが、これが冷泉家蔵本初丁の第一首目であることを思えば、書陵部蔵本の書写者が冷泉家蔵本のやや長めな重点に慣れていなかった故と考えられる。此例も含めて重点の減少がいかなる位置においてみられるかを整理すると、自立語語頭で一九、自立語語中で四、付属語語頭で一、と語頭位置が大半を占めている。この位置での重点使用の減少という一般的傾向に添うものである。

自立語語頭での減少一九例についてさらに詳しくみると、漢字を使用したことに伴うものが一〇例、仮名を使用したことに伴うものが九例みられる。前者の例としては「あき、り」(二一番歌 三ウ)を「あき霧」とした例、「あけぬ／ともをりや／まとはむ、めのはな」(二九番歌 一三ウ)を「あけぬともおりやまとはむ梅のはな」とした例、「わひ、と」(二二八番歌 一八ウ)を「わひ人」とした例などがすでに掲げた「あきの、の」等の例と共に挙げられる。

一方重点を仮名に置き換えた場合、改行などがなければそこには同字連続が発生するが、その同字連続が書陵部蔵本においてどのように書記されているかについてみることにする。各例の後者が書陵部蔵本のかたちである。

c とし事にともひきつらねくかりを／いくたひきぬと、ふ人そなき
(冷四オ)

としことにともひきつらねくるかりを／いくたひきぬ(と)〈登〉
ふ人そなき

d かくてのみ、つ、そしのふむらさきのいく／しほそめしふちのはな
そも(五六番歌 冷六オ)

かくての(ミ)〈み〉つ、そしのふむらさきの／いくしほそめし藤
のはらそも

e 今日くれて／あすになりなん／ふちのはなかけて／のみこそ春を、
しまめ(一〇〇番歌 冷一〇ウ)

今日くれてあすになりなんふちのはな／かけにのみこそ春をおしま
め

f いま、てに／ちらすは／あれとさくらはな、／きものとのみおもほ
ゆるかな(一一五番歌 冷一二ウ)

いま、てにちらすはあれとさくらは(那)／(な)きものとのみお
いま、てにちらすはあれとさくらは(那)／(な)きものとのみお

もほゆるかな

g かせにのみ／*おほせてやむ、／めの／はな／の心は／しれるも
のかは(一三〇番歌 冷一三ウ*他本おほせやはてむ)

風にのみおほせてやむ、めの(者)〈那〉／(者)〈な〉のこ、ろは
しれるものかは

h かせふかぬ／ほとにをりて(＊ん)、／めのはな我て／からこそち
らはちらさめ(一三七番歌 冷一四オ)

かせふかぬほとにおりても梅のはな『我手からこそちらさめ
さくらはな／をちくる／みつのたえ／さらは、や／くちるともなけ
か(ましやは)(一六五番歌 冷一五ウ)

さくらはな落くる水のたえさら(ハ)／(者)やくちるともなけ(空
白)

j たまくしけあけかたにするあきのよそ心ひとつを、さめかねつる
(二〇二番歌 冷一七ウ)

玉くしけあけかたにする秋のよそ／こ、ろひとつをおさめかねつる

k 月かけにいろわきかたし、らきくはをりてもをらぬこ、ちこそすれ
(二〇六番歌 冷一七ウ)

月かけにいろわきかた(し)〈志〉らきくは『おりてもおらぬこ、
ちこそすれ

c、kの各例は種々の興味深いことがらを提示している。同字が連続した場合に使用される重点は書記上の手間を省くということに使命の一つがあるが、仮名勝ちに書記される文献においては、それがどの位置で使用されたとしても、仮名の連続を避けるという意味合いにおいて、消極的にしる言語の「分節」に関わる要素を内包していたとみるべきであろう。重点が次第に使用されなくなっていくという理由については充分に考える必要があるが、今ここでは措く。重点が使用されなければ必然的にそこに

は同字の連続が存在することになるが、これをわかりやすく「分節」する一つの方法が同字に充てる仮名字母を変える「変字」であったと考える。もつともその変字が行われた理由は、同じ仮名に属する「字形」が複数存在するのであるから、同じ字形を連ねることは曲がない、というような、専ら美的な、つまり大げさに言えば書道的な配慮からであったかもしれない。そう考えるのがこのことからの契機としてはむしろ自然なように思われる。ただしこれはここで述べているごとき縦方向の変字が、つねに書道的な完成度を追求したと覚しきテキストにしかみられないということを用意しない。中世の具体的文献を見渡せばそうしたことがらにさして意を用いているとも思えないものにもこうした変字がみられる。しかしまたどんな性質の文献にも無条件でみえるものともいえないのであり、そこにこうしたことがらが観察される(文字社会)というものを設定する必要がある。そうした変字が分節に関する「手当」になっていたことを指摘しておきたいのである。cdkがそうした例である。fiにも変字がみられるが、むしろ改行を挟んでいることを問題にすべきであろう。すなわちfiは仮に重点を使用すればそれが行頭に位置することになる。行頭での重点使用を避ける傾向は夙に池田亀鑑が青谿書屋本『土左日記』の分析を通して指摘したごとく藤原為家の時代にすでにみえ、江戸時代には真名の重点に関してではあるが「又行(クタリ)つまりて、下に浦とかき、上へあけて、々などかくへからす、もししか下につまり/たらん時は上にも浦とかくへしとそ備書家などのかけるもの/には、此あやまり多き事なり」(富士谷御杖『北辺随筆』卷之三)なる記述がみられるに至っている。改行によって隔てられれば、そこに仮に同字形が配されても問題はないはずであるが、fiは尚変字を行う。gも行頭での重点使用を避けた例として考えられよう。

hはまた別の問題を提示する。冷泉家蔵本においては現在使用する(ん)に近い字形(*ん)で現す)が次のように使用されている。

1 ゆめにたにうれしとお(*ん)は、うつゝにて/わひしきよりは猶
まさりな(*ん)(五番歌 一ウ)
m 春のよの/やみはあやなし/(*ん)めのはな/いろこそ/見えね
かやは/かくるゝ、(一一ウ)

こうした表記をみせる文献は青谿書屋本『土左日記』つまり藤原為家筆本『土左日記』を初めとして、書写年時の古いものには少なくない。こうした冷泉家蔵本を書陵部蔵本はよく読み解き、前掲1mの例であれば「おもは、」「まさりなむ」「むめのはな」と写す。しかしhの例のみ誤認している。書陵部蔵本書写者はおそらく「をりて(*ん)、/めのはな」から「むめ」をまず認め「梅(のはな)」と漢字表記に変換することを考え、次にそれに先行する助詞(*ん)を考えた際に今までもあった、仮名「も」との結びつきを考えて誤認したと思われる。冷泉家蔵本の書写を任される程の人物であれば(*ん)に「も」「む」「ん」を配することもさして困難なく行い得たであろうが、此箇所はいわば上手の手から水が漏れた、と言ふべきか。

二の四 かなづかいについて

前節で掲げた1jの例はそれぞれ、冷泉家蔵本「春を、しまめ」「心ひとつを、さめかねつる」を書陵部蔵本が「春をおしまめ」「こゝろひとつをおさめかねつる」とした例である。冷泉家蔵本の書写年時は前述のごとく一一世紀末―一二世紀初頭頃と考えられている。とすれば冷泉家蔵本が書写された時には一〇〇〇年頃から始まるとされる音韻オヲの混同も進行していたであろうし、またハ行転呼音現象も時代相応に進んでいたことになる。そうした目で冷泉家蔵本をみわたすと、案外とかなづかいの破綻を見せおらず、古典かなづかいに一致しない例としては「ひきうへし(引

植) (一七番歌 三オ) 「なを(尚) (二七一番歌 一六オ/一九三番歌 一七オ) の三例を数えるのみであり、当該本の書写年時の古さ及び素性の良さを物語る。これらの語の古典かなづかいが「をしむ(借)」「をさむ(収)」であることと冷泉家蔵本のこうした状況とを考え併せれば、前掲の例は「をしまめ」「をさめかねつる」を意図したものとまずは考えてよいだろう。書陵部蔵本書写者にしても、もつとも普通に冷泉家蔵本の表記を読み解けばそうなたはずであるが、ここではかなづかいに変更が加えられている。書陵部蔵本が冷泉家蔵本のかなづかいに変更を加えた例は他にも次のようにみえる。「をる(折)」「を(おる)」とした例が一〇例(一オ・一一ウ・一二ウ・一三ウ・一四オ・一五ウ②・一六オ②・一七ウ) (* () 内は冷

〔表〕 冷泉家蔵本と書陵部蔵本とのかなづかいが異なる箇所

古典仮名遣	冷泉家蔵本	書陵部蔵本	文明11年本仮名文字遣	連歌書	版本仮名文字遣	新撰仮名文字遣	類字仮名遣	初心仮名遣
たわわ	たわ、	たは、	*たはむ	ー	*たはむ	ー	たは、	たはむ
おい(老)ゝ つひに	おいゝ つひに	おひゝ つゐに	おひ／おひい	おい つゐに	おい つゐに	おひかけ(老整) つゐに	おひ おい共 つゐにつゐに共	ー つゐに共に用
おく(置) おと(音) とほし(遠) をし(惜)ゝ をる(折)	おく おと とほし をしゝ をる	をく をと とをし おしゝ おる	をく をとゝ とをし おしゝ *たをる*花をおる	をく をと とをし おしむ おる	をく をとゝ とをし おしゝ *花をおる	をく をとゝ とをし おしゝ おる	をく をと とをし おし おる	をく をと とをし をしむ ー

凡例

- 1 かなづかいが問題になる音韻毎にグループ化し、活用語は終止形をもって代表させた。
- 2 文明十一年本『仮名文字遣』(慶長) 版本『仮名文字遣』は『駒澤大学国語研究資料第二』(一九八〇年汲古書院刊)による。
- 3 『新撰仮名文字遣』は亀井孝氏蔵本による。(註8)
- 4 連歌書は拙稿(一九八四)による。
- 5 『類字仮名遣』(寛文六 一六六六年刊)『初心仮名遣』(元禄四 一六九一年刊)は架蔵本によるが、前者は刊記を欠く。
- 6 *は関連語形を援用した場合に付した。

泉家蔵本での所在「おい(老)ゝ」を「おひ」とした例が八例(二ウ・二オ・二ウ・五オ・一二オ・一四オ・一五オ②)「つひに」を「つゐに」とした例が五例(三ウ・七オ・一〇オ・一二オ・一八オ)「おき(置)ゝ」を「をきゝ」とした例が三例(四オ・七ウ・一八ウ)「おと(音)を」と「とした例が二例(八オ五・一七ウ)」「とほ(遠)ゝ」を「とを」とした例が二例(一〇オ・一五ウ)「たわ、」を「たは、」とした例が一例(一二ウ)「をしゝ(借)を」「おしゝ」とした例が六例(一三ウ②・一四ウ③・一五オ)みえる。

〔表〕 はこれらの語が中世、近世初期のかなづかい書にどのようなかたちで採り上げられているか、及び中世期の実態として連歌書におけるかな

づかいを併せたものである。一見して明らかかなように書陵部蔵本は中世・近世初期のかなづかいを示しており、冷泉家蔵本書写に際しておそらくは無意識の中に自身のかなづかいを現したものである。書写態度ということに関しては、それは褒められたものではないが、かなづかいの枠組みということになれば、それが随分とつよく存在したことを示している。それはこのように図らずも露呈したものを採り上げているのだから、当然枠組みのつよさは予想されるのであるが、また仮名遣書の側からいえば今はこれらの例に限るにしても実態に即したかたちを掲げていることにもなる。ただし、僅かこれだけの例を注視しても、例えば「老」に関して、連歌書、慶長版本『假名文字遣』が一致して「おい」であるのに、『類字仮名遣』で「おい共」としながらも「おひ」を掲げていること、「つひに」に関しては慶長版本『假名文字遣』、『類字仮名遣』、『初心仮名遣』が「つゐに」を並立させていることなど、一々の例はそれぞれ気にかかるが、こうしたことがらについては機会を改めて十分な準備の下に臨むことにする。

二の五 その他のことごとについて

冷泉家蔵本「春にあふと(*ん)ふ／こ、ろは／うれしくて／いまひと、せの／おいそ、ひ／ける」(二三五番歌 一四才)を書陵部蔵本は「春にあふと思ふこ、ろはうれしくて／いまひと、せのおひそ、ひける」と写す。冷泉家蔵本の表記を単独で仮名表記そのままに発声することがあったのかどうかについては別に考える必要があるが、少なくとも仮名として考えれば「もふ」とみるべきである。書陵部蔵本の表記がそれを意図していなかったと断言することは尚できないが、やはりその可能性はかなりひくいと思われる。「もふ」は『古事記』歌謡に「ちはやひと宇治の渡に渡り瀬に立てる梓弓まゆみい伐らむと心はもへどい取らむと心はもへどもとはへ君を思ひ末へは妹を思ひ出」(許許呂波母閉杼) (応神)とみえ、また『万

葉集』にも「梅の花折りかざしつづ諸人の遊ぶと見れば都しぞもふ(弥夜古之叙毛布)」(巻五 八四三)「山吹は日に日に咲きぬうるはしと吾がもふ君はしくしく思ほゆ(安我毛布伎美波)」(巻一七 三九七四)とみえる。また『土左日記』二月五日の条の「いのりくるかさまともふを／あやなくもかもめさへたになみ／とみゆらん」(青谿書屋本三七〇七九)を定家筆本、三條西家本、日本大学図書館蔵本、近衛家陽明文庫蔵本といった根幹写本がいずれもそのまま「もふ」と書写しているところから考えれば、語形からいえば「おもふ」が僻められていることは明らかで、それ故文献の表には姿を現しにくいことは当然のこととして、しかし例えば「和歌世界」では生き続けた語形と考える方がむしろ自然かもしれない。また一方でそれが理解されずに、転写を重ねる間に「もふ」が「おもふ」となり、さらに漢字表記された例もあるであろうし、「おもふ」を介さずに漢字表記された例もある。この場合、その漢字表記がなされた時点でそれが意図する語形には二つの場合が結果的には考えられるが、書陵部蔵本でのそれは、おそらく「おもふ」であろう。冷泉家蔵本には今一箇所「をみなへし人もとゆへにあきの、のちくさなからはなをもふかな」(二〇七番歌 一七ウ)がある。冷泉家蔵本のかなづかいは前述したごとく古典かなづかいにきわめてよく一致しているところから「をもふ」が「思」の表記である可能性はまずないと考えるが、書陵部蔵本は「をみなへしひと」とゆへにあきの野、／ちくさなからはなを思ふかな」とする。やはりこれらは書陵部蔵本書写者の存知の外なる語形に書写の過程で変更が加えられた例といえよう。冷泉家蔵本の「すくしこし」を書陵部蔵本が「すこしこし」とした二の前掲一―番歌も「すくす(過)」と「すこす」との二語形の新旧ということと同様にいえるか。上代資料においては「すくす」が一般で「すこす」はきわめて少なく、『万葉集』東歌(三五六四)の例が知られるのみである。中世以降は「すこす」が一般的になったと覚しく、『日葡辞書』には「Sugoxi / Iysugoxi / Vomoisugoxi / Yarisugoxi」はみえ

るが、「すぐす」形が見出しとして立項されていない。

また冷泉家蔵本の「冬のいけにむすをしとりのつれもなくそこにかよはん人(以下破損)」「(二二九番歌 一八ウ)の「むす」を書陵部蔵本は「すむ」とする。「むす」が誤写である可能性もまったくなくはないであろうが、『万葉集』に「吾妹子が植多し梅のき見るごとこころむせつつ涙し流る」(卷三 四五三)の悲しみのために心がつまるという意の「むす」で解し得ないか。『躬恒集』の伝本は一樣に「すむ」のかたちを伝えているが、これは「むす」が理解されなくなつてから書き僻められたということも考えられよう。

以上冷泉家蔵本『六条官旨集』『躬恒集』と書陵部蔵本の各々を彼此比較することを通して転写に際して起こることがらを主として言語的観点から考えてみた。比較によつて冷泉家蔵本、書陵部蔵本双方のテキストが内包する種々の語学的問題が浮き彫りになつたといえよう。冷泉家蔵本の書写年時が古く善本であることに相応して多くのことがらが看取できるともいえる。さらにまた異なる場合についても考えてみたい。

註1 藤本孝一「御所本歌書と冷泉家御文庫(一九九四年七月二日)』しくれてい」
第四十九号

2 拙稿(一九九五)

3 テキストとして、冷泉家蔵本『六条院官旨集』は『冷泉家時雨亭叢書 平安私家集二』に、書陵部蔵本『六条院官旨集』(函号五〇一・一三〇)は国立国文学研究資料館蔵の、同本のマイクロフィルムから焼き付けた紙焼写真による。字体の検索等に備える為冷泉家蔵本を自ら一旦翻字し、パソコン・コンピュータにテキストファイルを作製した。その過程で先行する翻刻を参照させていただいたが、一、二気づいた点があるのでここに記しておく。書陵部蔵本『六条院官旨集』は『桂宮本叢書』第十卷(一九五九年 養徳社刊)(以下翻刻一)また『私家集大成第一卷 中古Ⅱ』(一

九七五年 明治書院刊)(以下翻刻二)に翻刻されている。翻刻一・二共

三三番歌歌題を「火むろ」とする。字形は「火むろ」であるが、この「火」を敢えて漢字と認めるよりも仮名字体と考えて「ひむろ」とするのが自然ではないか。また四節で扱っているnの例を翻刻一・二共に「たひとの」とするが「こ」とはやはりよみ難いのではないだろうか。また翻刻一・二共に「一二番歌」よの中のものなきことし「つねなはは、かなしとおもふ」われそはかなき」(二四〇八)の重点を落とす。これらの他に翻刻二が四節で扱っている七七番歌の初句「おもふこと」の「も」を落とすのは誤植であろう。また冷泉家蔵本『躬恒集』は『冷泉家時雨亭叢書 平安私家集一』に、書陵部蔵本『躬恒集』(函号五〇一・一三〇六)は国立国文学研究資料館蔵の、同本のマイクロフィルムから焼き付けた紙焼写真による。

4 本稿での仮名字字遣は安田章(一九六七)に従う。所謂異体仮名レベルでの用字法を指す。

5 奥書に「乍去むの字に(ん)を書さの字に(散)を書すの字に(数)をかき其外/當世之假名使に不相應之間予/書改よみよくせんかため也」と積極的表記を変えたことを記す近衛家陽明文庫蔵本『土左日記』(慶長頃写か)では青谿書屋本に存した二八四箇所の(支)が僅か二箇所しかみられず、逆に青谿書屋本に六箇所しかみえなかつた(き)が、二二三箇所になつてゐる。こうしたことがらについては拙稿(一九九六a)で少しくふれた。

6 冷泉家蔵本では(ん)が仮名「も」に対しても使用されている。撥音部分に充てられている(ん)との間には、少なくとも当該書においては字形差はまったく感じられない。このことがらについては大坪併治(一九六一)、鶴久(一九六六)で扱われ、こまつひでお(一九九五)も(不規則な対応)として言及した。最近では中川美和(一九九四)が採り上げ、拙稿(一九九六)でもややふれたが、いまだ明解な解釈が提示されるに至っていない。また書陵部蔵本は冷泉家蔵本の「ふけん」(二四ウ七)を「ふけん」とする。歌番号は『私家集大成』第一卷中古Ⅰ(一九七三年明治書院刊)所収、『躬恒Ⅰ』(書陵部蔵本 函号五一・二八)に施されたものに便宜従つた。大友信一先生のご厚意により亀井孝氏蔵本のネガフィルムの紙焼写真の借覧が適つたのでここはそれに基づく。大友先生の学恩に感謝申し上げます。

のです。

補注 『土佐日記』書写については夙に池田亀鑑が(恐らく定家は、第一日に五
四頁(廿九日)まで書いて一旦中止し、翌日改めて五六頁(卅日)から書
き始めたのではなからうか)(一九四一年岩波書店刊『古典の批判的処置
に関する研究』第二部一四頁)と指摘し、清水義秋(一九七三)もこれ
を支持する。これは二七丁分ということになるが、およそこれが一日の書
写の目安となろう。

参考文献

大坪併治 一九六一 ム・モの相通(風間書房刊『訓点語の研究』)
小笠原一 一九七三 「又」と「まだ・事」と「来と」―定家自筆本
に關して―(『学芸国語国文学』第八号)
こまつひでお 一九九五 仮名文テクストの文献学的処理―書記の理論・
的確な解釈・音韻史との相関・資料の均質性―
(『国語と国文学』第七二卷第九号)
今野真二 一九八四 連歌書のかなづかい(『国語学』第一三九集)
一九九五 a 書記における「行」意識(『國學院雜誌』第九六
卷第一二号)
一九九五 b 臨摸本における本文転化―書陵部蔵本『遺塵和
歌集』の場合―(『高知大学学術研究報告』第
四四卷人文学分冊)
一九九六 a 當世之假名使(『文学語学』第一五一号)
一九九六 b 分節機能からみた重点―『土佐日記』根幹諸本
を中心資料として―(高知大学人文学部人文学
科『人文学研究』第四号)
清水義秋 一九七三 定家の用字と注釈意識―漢字の場合―(『相模
工業大学紀要』第七卷第一号)
鶴 久 一九六六 ム・モの表記に用ゐられたといはれる仮名「ん」
の考察(『香椎潟』第二二号)

中川美和

一九九四

平安時代平仮名文献における「ん」字の表記につ
いての考察(『都大論究』第三二号)

安田 章

一九六七

仮名資料序(『論究日本文学』第二九号)

平成八年(一九九六年) 九月十日受理

平成八年(一九九六年) 十二月二五日発行